

第1章 掛川市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置・面積

本市は、日本列島のほぼ中央にあり、東京と大阪のほぼ中間点に位置している。

静岡県の西部に位置し、東側は御前崎市、菊川市及び島田市に、また西側は袋井市及び森町に接しており、南側は遠州灘(太平洋)に面している。

面積は 265.69 km²であり、東西約 15km、南北に約 30km と南北方向に細長く、中央部がくびれた形状である。

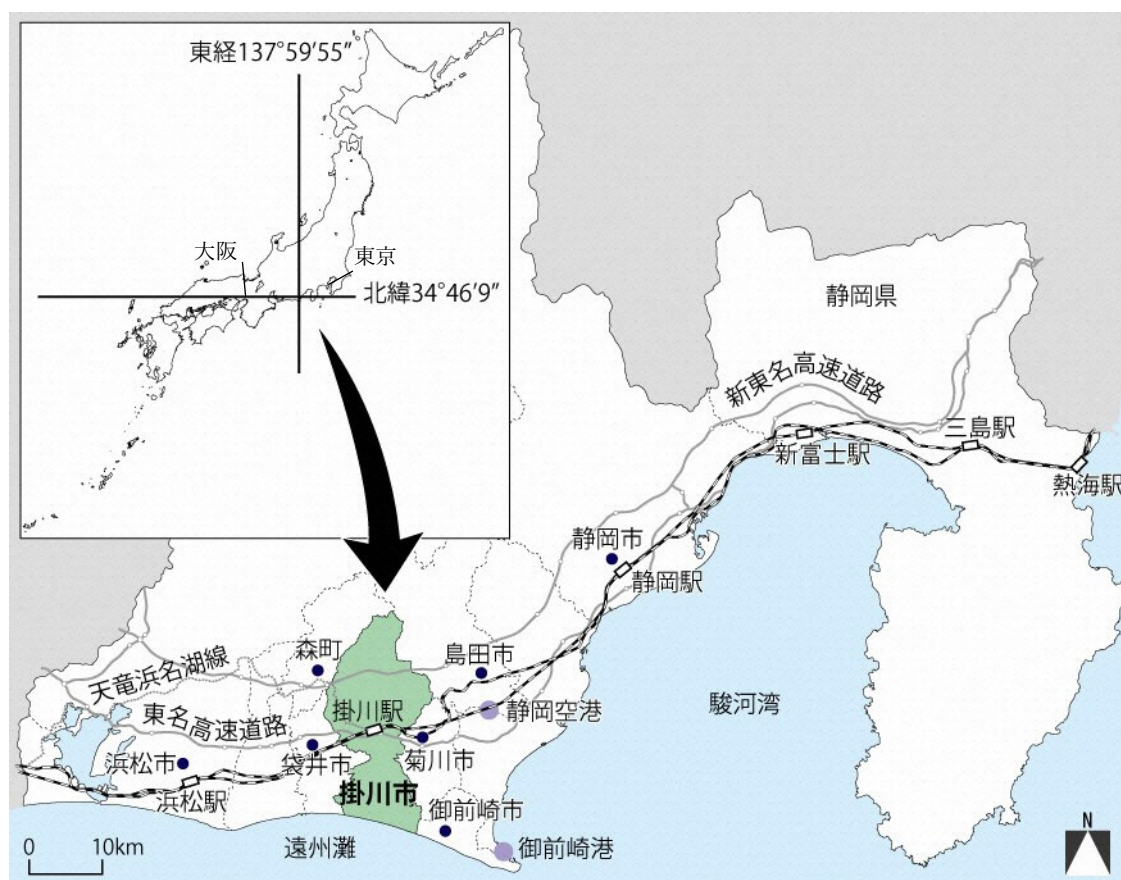


図 1-1 掛川市の位置

(2) 地形・地質

①地形

北部には、南アルプスの最南にあたる標高 839m の八高山をはじめとする山地があり、その南は逆川が流れる平地になっている。この平地の南側には、標高 264m の小笠山があり、四方に複雑な谷を持った丘陵地となっている。市域の南縁部には、遠州灘海岸が東西に続いており、小笠山の丘陵地との間に平地を形成している。

本市には多くの小河川があり、大部分は太田川水系、菊川水系及び弁財天川水系の3水系に分類される。原野谷川や逆川などは太田川に、牛淵川や佐束川などは菊川に、西大谷川や大須賀新川などは弁財天川に合流して、それぞれ遠州灘(太平洋)に注ぐ。背後に高い山が少なく、森林の保水能力も低いため、河川流量は乏しい。

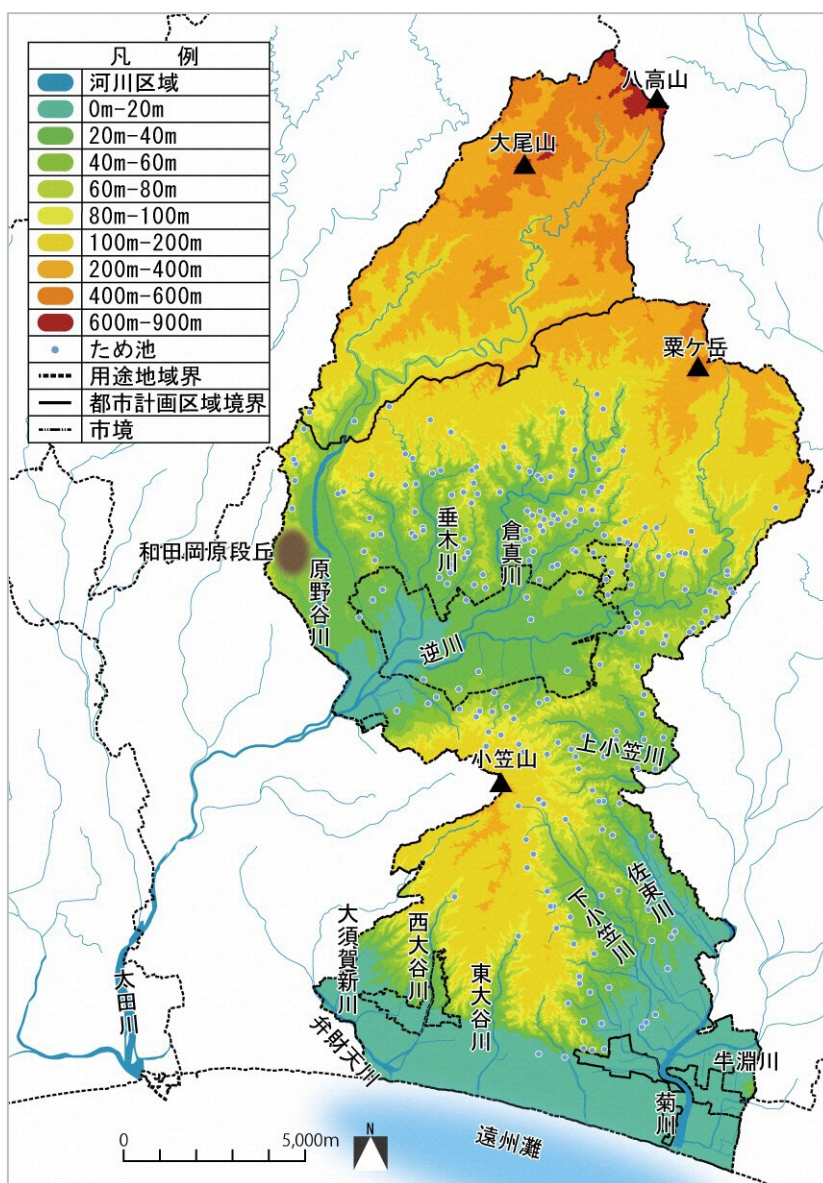


図 1-2 地形及び水系図

資料：平成 24 年度都市計画基礎調査、ため池台帳（平成 27 年 4 月 1 日現在）

②地質

北部の山地には、新生代古第三紀（約 4,500 万年前）に海底に堆積した砂岩層や泥岩層、砂岩泥岩互層からなる三倉層群が分布する。その南には新第三紀中新世（2,000 万年前）に海底に堆積した砂岩層や泥岩層、珪質な砂岩泥岩互層からなる倉真層群、1,500 万年前に堆積した凝灰岩層や泥岩層からなる西郷層群が分布する。

掛川市街周辺から南部の丘陵地域には、新第三紀鮮新世～前期更新世（533 万～180 万年前）に海底に堆積した砂層や泥層、砂泥互層からなる掛川層群が分布する。南西部の小笠山には前期～中期更新世（180 万～40 万年前）に海底の三角州や河川扇状地で堆積した泥層や礫層からなる小笠層群が分布する。

掛川層群は、御前崎市から菊川市、掛川市、袋井市にかけて広く分布するが、掛川市内ではその上部に当たる上内田層、大日層、土方層が主に分布する。これら掛川層群上部には、300 種類以上の貝、サメの歯やクジラの骨などの化石が多数含まれる。それらは「掛川動物群集」と呼ばれ、この地質年代における日本列島太平洋岸の代表的な化石群集とされている。約 400 万年前、本郷から日坂を結んだラインまで、海が入りこんでいた。遠州灘海岸のような砂浜が広がり、そこには多くの貝が生息していた。次第に海は南に退き、海岸線も南に移動する。掛川層群の地層の堆積を追っていくことで、貝の進化を具体的に追うことができる。

- 沖積層（砂礫層 第四紀 完新世）
- 河岸段丘層（礫層 第四紀 後期更新世）
- 小笠層群（第四紀 鮮新世～前期更新世）
 - 袋井層（泥層）
 - 袋井層（扇状地礫層）
 - 可睡層（泥層）
 - 大須賀層（砂層）
 - 大須賀層（扇状地礫層）
 - 大須賀層（三角州礫層）
 - 曾我層（チャネル礫層）
 - 曾我層（砂層）
 - 曾我層（泥層）
- 掛川層群（新第三紀・第四紀 鮮新世～前期更新世）
 - 火山灰層
 - 土方層（泥層優勢砂泥互層）
 - 大日層（砂層）
 - 大日層（砂質シルト層）
 - 砂層優勢砂泥互層
 - 泥層優勢砂泥互層
 - 泥層
 - 砂層
 - 礫層
- 西郷層群（新第三紀 中期中新世前期）
 - 五明層 泥岩層
 - 戸沢層 砂岩層・凝灰岩層
- 倉真層群（新第三紀 前期中新世後期）
 - 真砂層 泥岩層
 - 松葉層 珪質砂岩泥岩互層
 - 戸綿層 泥岩層
 - 天方層 砂岩層・礫岩層
 - 東道層 泥岩層・砂岩泥岩互層
- 瀬戸川層群（古第三紀）砂岩層・泥岩層・火山岩
- 三倉層群（古第三紀）砂岩層・砂岩泥岩互層

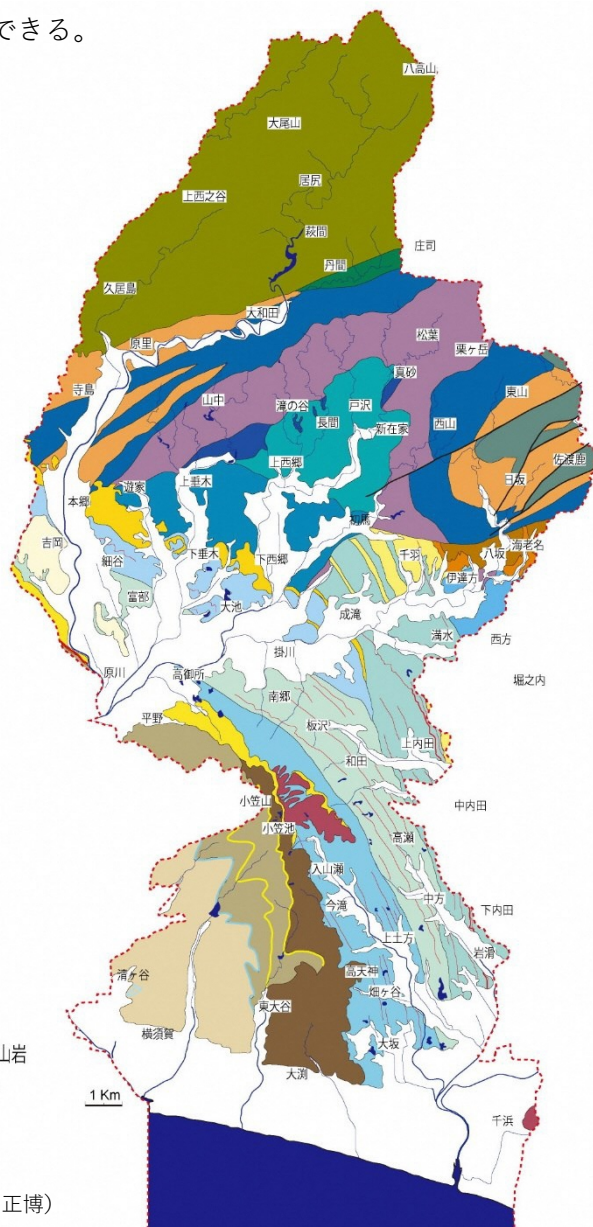


図 1-3 掛川地質図 (2023 柴 正博)

(3) 生態系

①植生

本市が毎年発行している環境報告書『掛川市の環境（令和3年度）』によると、本市では202科1,964種の植物が確認されている。

市北部の山間部は、スギ・ヒノキの人工林が広い面積を占めている。地域本来の自然植生に近いシイ・カシの樹齢の高い林は、大尾山や八高山等で見られる。

粟ヶ岳^{あわがたけ}周辺には、茶畑の敷き草に利用するため、茶農家の人たちが毎年草刈をしているススキやササの草原があり、キキョウ、ハルリンドウなど草地に生える植物が多い。阿波々^{あわわ}神社^{しゃそう}の社叢は県指定の天然記念物で、市域にあった古くからの自然の姿を最もよく残している。

小笠山周辺は、海岸や岩場に生えるウバメガシと山地に生えるアカガシが混生している。切り立った崖がシダ植物の生育に必要な湿度を保っていることから、多数のシダ植物が自生している。スジヒトツバは、県内では小笠山が唯一の生育地であり、日本列島の北限自生地である。またタカサゴシダは、本市が分布の東限になる。

弁財天川の河口には広大な干潟が広がり、そこには100個体を超えるハマボウが自生している。これほどの自生地は県内でも希少である。その他、ヨシ群落、アイアシ群落、シオクグ群落、ハマゴウなどの植物が生育している。

また、遠州灘沿岸部では海から吹きつける塩分や砂の粒を含んだ風から、田や畑の作物を守るためにクロマツが植えられている。



スジヒトツバ

②動物

『掛川市の環境（令和3年度）』によると、本市では2,584種の動物（哺乳類：28種、鳥類：209種、爬虫類16種、両生類14種、淡水魚類：79種類、昆虫類：2,185種、陸・淡水産貝類：53種）が確認されている。

市北部の山間部は、南アルプスの山系とつながっているため、クマタカなど山地の動物が生息している。

粟ヶ岳周辺は、県内でも貴重な草原が残っており、カヤネズミ、カケガワフキバッタなどが生息している。

小笠山周辺は、サンコウチョウなど多くの種類の鳥類が生息している。

海岸部は、アカウミガメが産卵する貴重な砂浜となっており、マハゼなど河口に住む動物も見られる。



カケガワフキバッタ

(4) 気象

年間平均気温は16～17℃と比較的温暖で、年間降水量は、過去5年の平均は1,840mmとなっている。

夏季には高温多湿となり、蒸し暑い日が多い。冬季の降雪はほとんどないが、「遠州のカラッ^{かせ}風」と言われる季節風が連続して吹くことが多く、実際の気温よりも寒さを感じやすい。また、年間の日照時間は、全国平均よりも長くなっている。

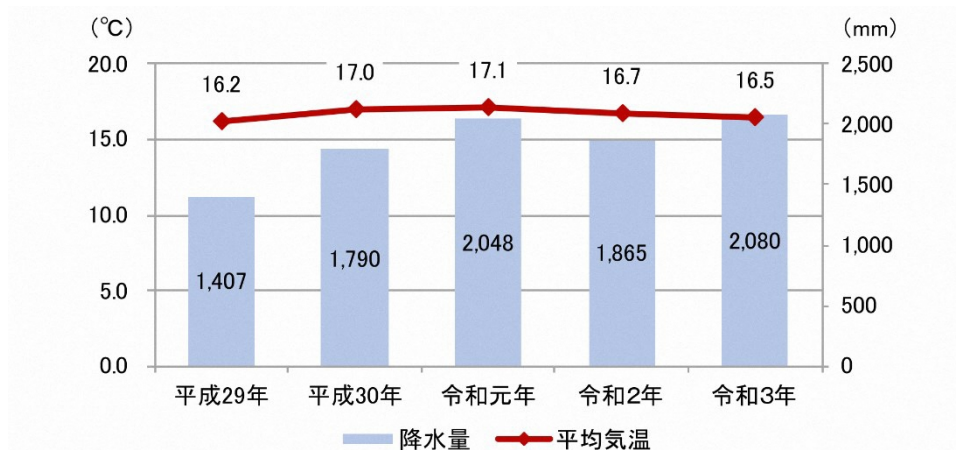


図 1-4 過去5年間の平均気温と降水量

資料：令和3年度版 掛川市統計書

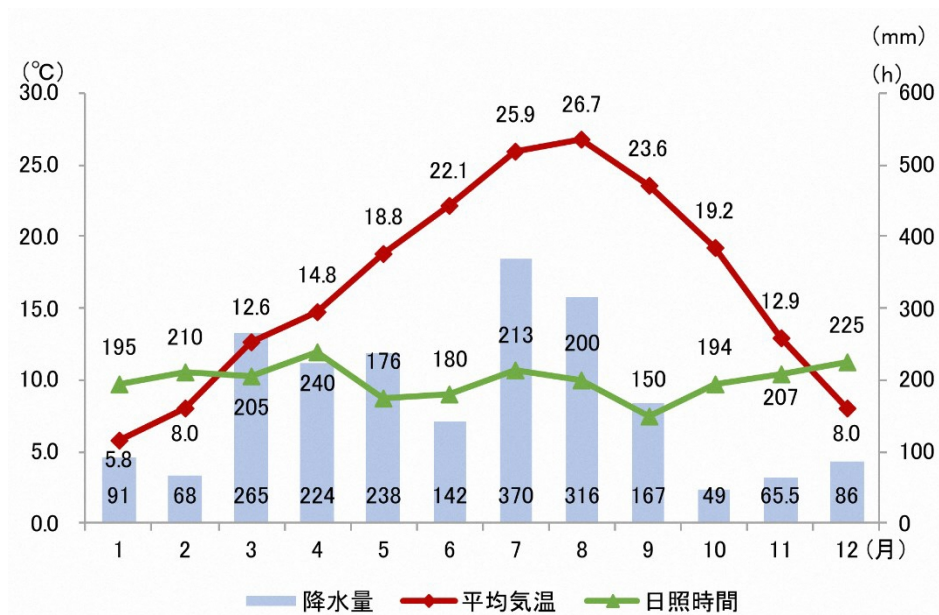


図 1-5 令和4年（2021）の月別平均気温、日照時間、降水量

※日照時間の月合計は御前崎市のデータ。

資料：令和3年度版 掛川市統計書、気象庁

2. 社会的状況

(1) 合併の変遷

本市は、平成 17 年（2005）4 月 1 日に、掛川市、大東町、大須賀町の 1 市 2 町の合併により誕生し、現在に至っている。

旧掛川市では、明治 22 年（1889）の町村制施行により、掛川町ほか 17 村が成立し、その後明治 28 年（1895）に掛川町の一部が分立して西南郷村が発足した。大正 14 年（1925）に大池村を、昭和 18 年（1943）に南郷村を、昭和 25 年（1950）に上内田村を掛川町に編入した。翌年、掛川町、西山口村、粟本村、西南郷村を廃止し、掛川町を新設、昭和 29 年（1954）に曾我村、東山口村を編入し、小笠郡掛川町を「掛川市」とした。翌年に日坂村、東山村を、昭和 32 年（1957）に北小笠村（桜木村、和田岡村の合併により昭和 29 年（1954）に新設）、原田村、原谷村を編入した。さらに、昭和 35 年（1960）に三笠村を編入し、6 万人を擁する市となった（昭和 35 年国勢調査）。

旧大東町では、明治 22 年（1889）の町村制施行により、大坂村ほか 7 村が成立した。その後、昭和 18 年（1943）に佐束村は岩滑村と合併し、昭和 30 年（1955）に土方村と佐束村が合併し城東村が誕生し、翌年、中村が城東村に編入合併した。一方、昭和 17 年（1942）に三俣村と三浜村が合併して睦浜村を新設し、昭和 30 年（1955）に睦浜村が大坂村に合併した。昭和 31 年（1956）に大坂村と千浜村が合併して大浜町となり、さらに昭和 32 年（1957）に旧中村海戸地区が編入合併した。昭和 48 年（1973）に大浜町と城東村が合併して「大東町」が誕生した。

旧大須賀町では、明治 22 年（1889）の町村施行により、大須賀村、大淵村、笠原村が誕生し、大正 3 年（1914）に大須賀村を町制施行により横須賀町と改めた。昭和 31 年（1956）に横須賀町、大淵村、笠原村の一部が合併して「大須賀町」が発足した。



図 1-6
平成 17 年（2005）の合併前の旧市町

掛川町	M28 西南郷村	S26	掛川市	H17 掛川市
大池村	T14			
南郷村		S18		
上内田村		S25		
西山口村		S26		
粟本村				
東山口村				
曾我村				
日坂村		S30		
東山村				
雨桜村	S7 桜木村	S29		
垂木村				
和田岡村				
原谷村		S32		
原田村				
原泉村		(一部) S31	大東町	S48 大東町
西郷村		S29		
倉真村				
千浜村				
大坂村		S31		
三浜村	S17 睦浜村	S30		
三俣村				
中村		(海戸) S32		
土方村		S31		
佐束村		S30		
岩滑村	S18		大須賀町	
大須賀村	T3 横須賀町			
大淵村		S31		
笠原村	(山崎の一部)			

図 1-7 合併経緯（明治 22 年以降）

(2) 土地利用状況

山林が 20.3%、農地（田、畑）が 23.3%、宅地が 10.2% を占め、比較的緑豊かでゆとりある土地の利用が行われている。（38.2%のその他には、ゴルフ場などが含まれる。）

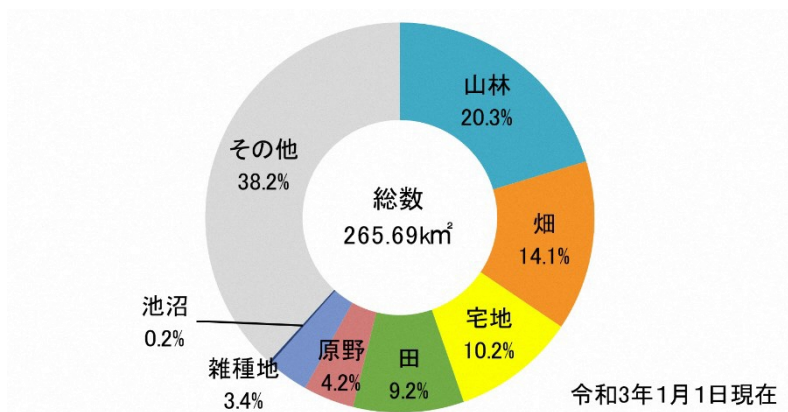


図 1-8 地目別面積（令和 3 年）

資料：令和 3 年度版 掛川市統計書

令和 3 年（2021）3 月 31 日現在、面積 26,569ha のうち 21,164ha（79.7%）が都市計画区域であり、そのうち 2,440.3ha（11.5%）が用途地域に指定されている。用途地域の構成比をみると、住居系用途 65.5%、商業系用途 4.5%、工業系用途 30.0%となっている。

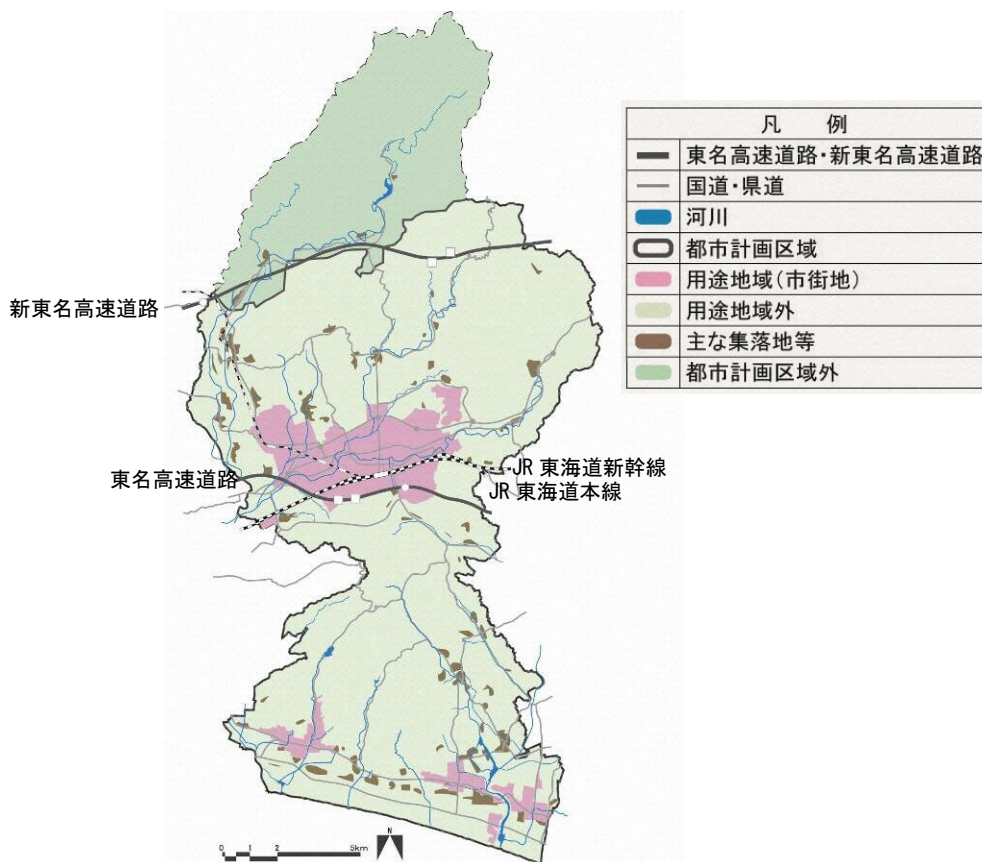


図 1-9 掛川市都市計画区域図

(3) 人口動態

令和5年(2023)6月30日現在の住民基本台帳人口によれば、総人口は115,678人である。平成17年(2005)の117,857人をピークに減少が続いていたが、平成27年(2015)から令和2年(2020)にかけて微増している。国立社会保障・人口問題研究所によれば、令和27年(2045)には93,992人になると予測されている。

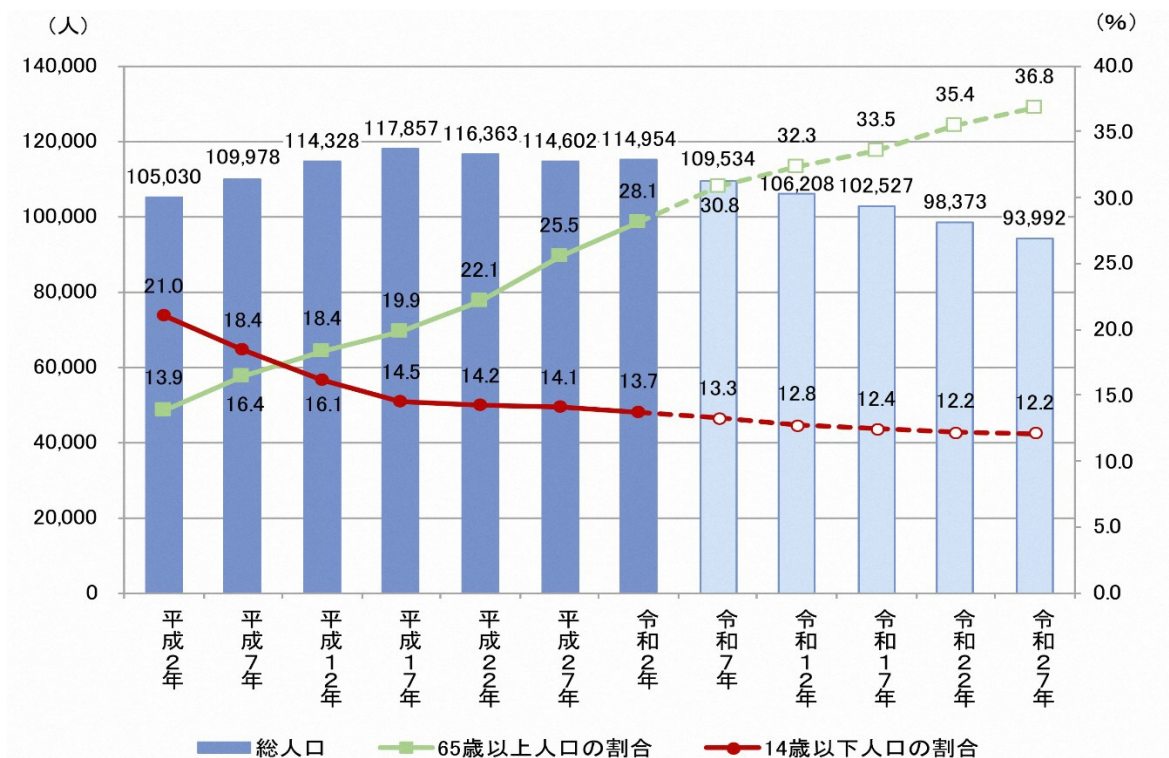


図1-10 総人口の推移と老年人口・年少人口の割合

※平成12年までは、合併前の旧市町の人口の合計。総人口には年齢不詳を含む。令和7年以降は将来推計人口。

資料：＜平成2～令和2年＞国勢調査、＜令和7～27年＞国立社会保障・人口問題研究所

令和5年(2023)6月30日現在の住民基本台帳人口によれば、世帯数は47,282世帯である。世帯数は増加が続いている一方、1世帯あたりの平均人員数は、核家族化などの進展を背景に減少が続いている。



図1-11 世帯数

※平成12年までは、合併前の旧市町の人口の合計。

資料：国勢調査

令和2年（2020）の年齢階級別人口は、生産年齢人口（15～64歳）割合は58.2%、高齢化率（65歳以上人口割合）は28.1%であり、生産年齢人口割合は減少傾向に、高齢化率は増加傾向にあり、少子高齢化が進行している。

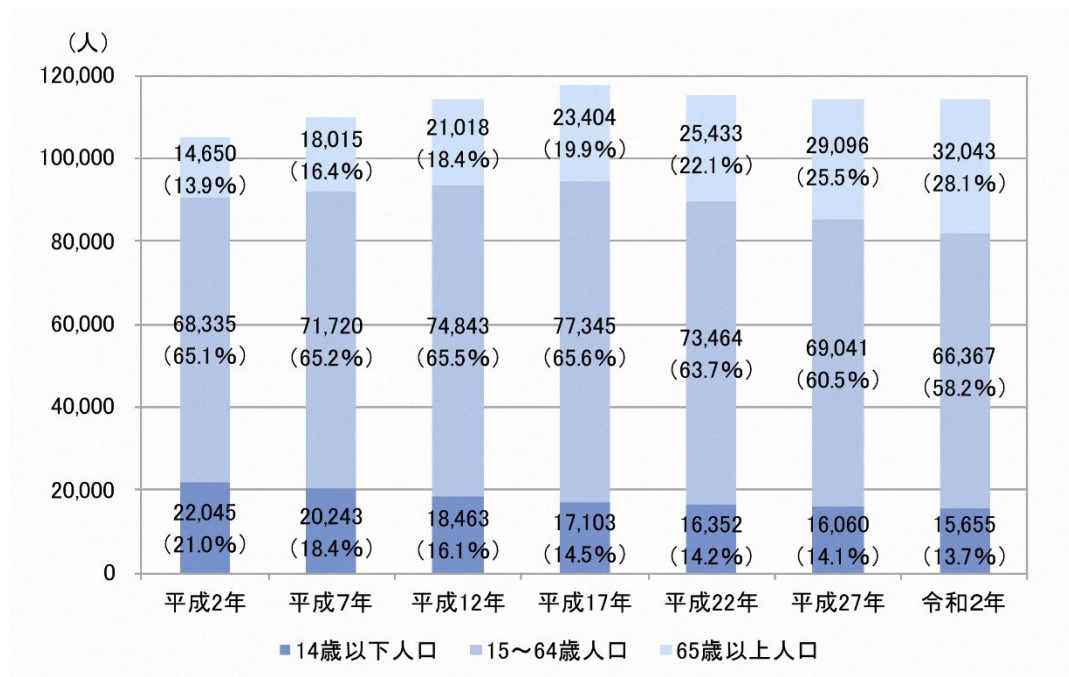


図 1-12 年齢階層別人口の推移

※総人口（年齢不詳を除く）に占める割合。

資料：国勢調査

(4) 交通機関

本市は、東海道や秋葉街道（塩の道）といった東西と南北の街道の発達により、日坂宿や掛川宿などの宿場町や、掛川城や横須賀城を中心とする城下町が形成され、発展してきた。

現在、市の中央部の低地には、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、東名高速道路、国道1号線が通り、南部の海岸沿いには国道150号が横断し、北西部には天竜浜名湖鉄道が通っている。平成21年（2009）には、市の東側約15kmに富士山静岡空港が開港した。平成24年（2012）には新東名高速道路が開通し、関東、関西の両経済圏にアクセスしやすくなった。

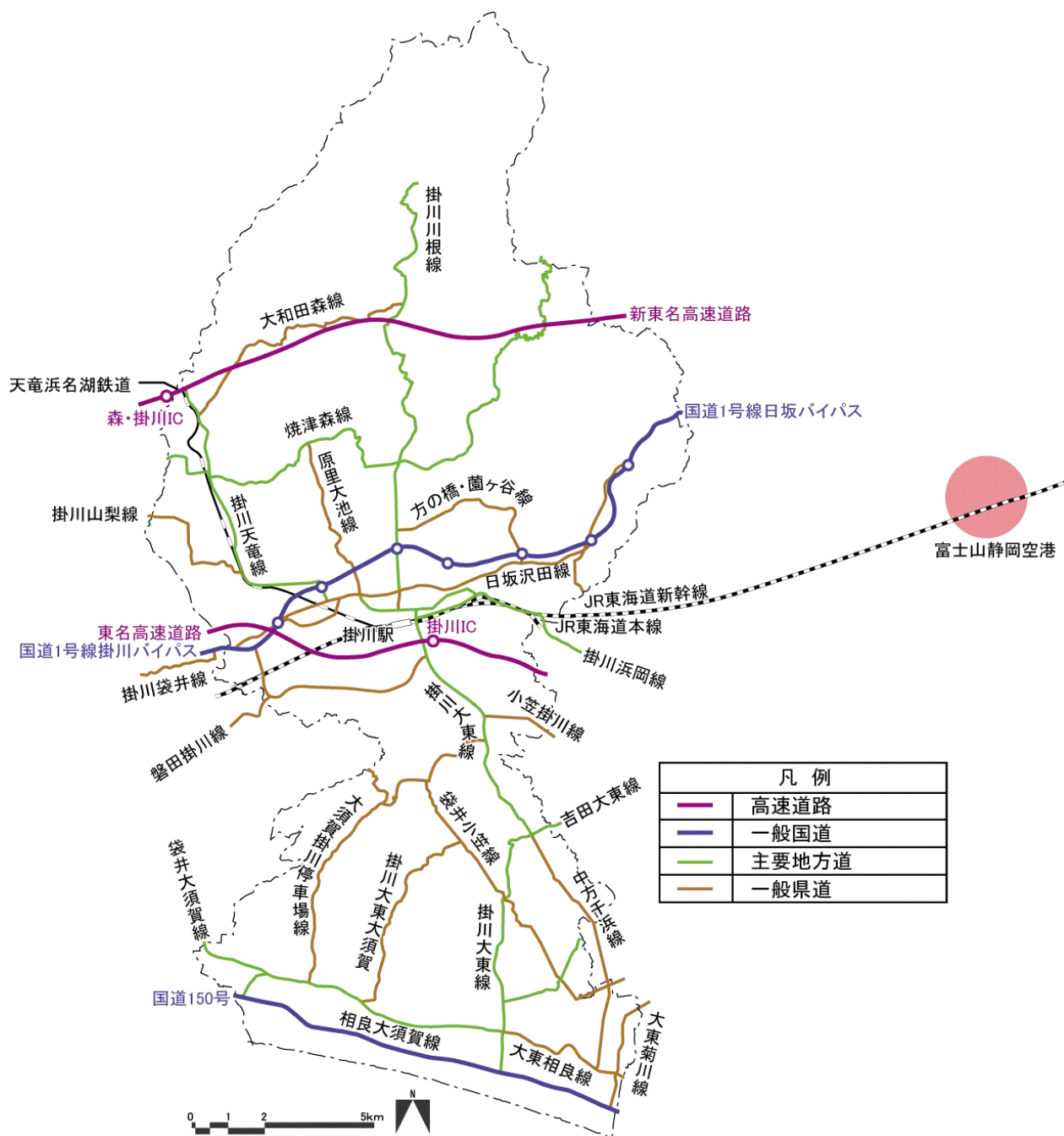


図 1-13 道路網・鉄道網図

鉄道駅として、JR 東海道新幹線に 1 駅、JR 東海道本線に 1 駅、天竜浜名湖鉄道に 8 駅ある。JR 東海の掛川駅（在来線と新幹線）及び天竜浜名湖鉄道各駅の年間乗車人数は、平成 30 年度（2018）まで概ね増加が続いていたが、令和元年度（2019）には減少に転じ、令和 2 年度（2020）は約 380 万人となっている。

交通事業者が運行する路線バスが市内に 3 路線あるほか、自主運行バスが 9 路線ある。路線バス及び自主運行バスの年間乗車人数は、平成 27 年度（2015）以降増加が続いたが、令和 2 年度（2020）には減少に転じ約 81 万人となっている。

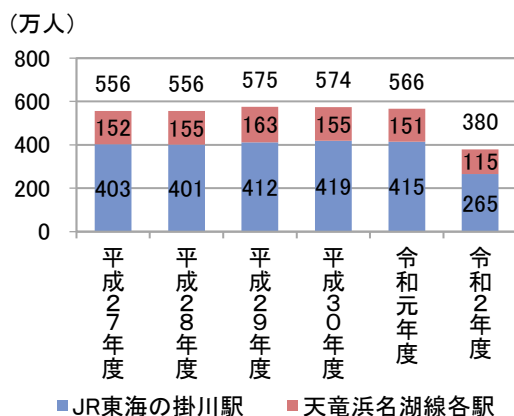


図 1-14 鉄道の年間乗車人数の推移

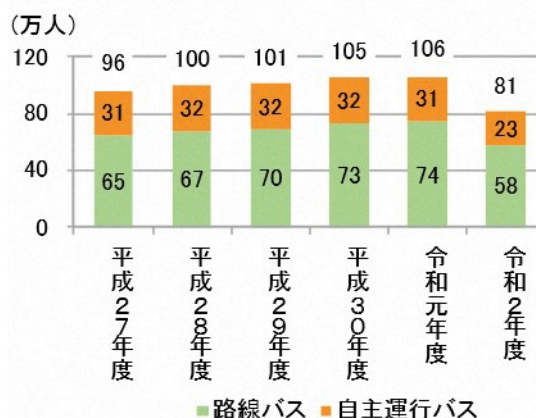


図 1-15 路線バス及び自主運行バスの年間乗車人数の推移

資料：令和 3 年度版 掛川市統計書

(5) 産業

就業者数は平成 17 年（2005）以降減少が続いており、令和 2 年（2020）は 59,427 人となっている。

産業別の比率を見ると、第 1 次産業及び第 2 次産業の就業人口の比率が減少傾向にあり、サービス業などを主体とした第 3 次産業就業人口の比率が増加傾向を示している。

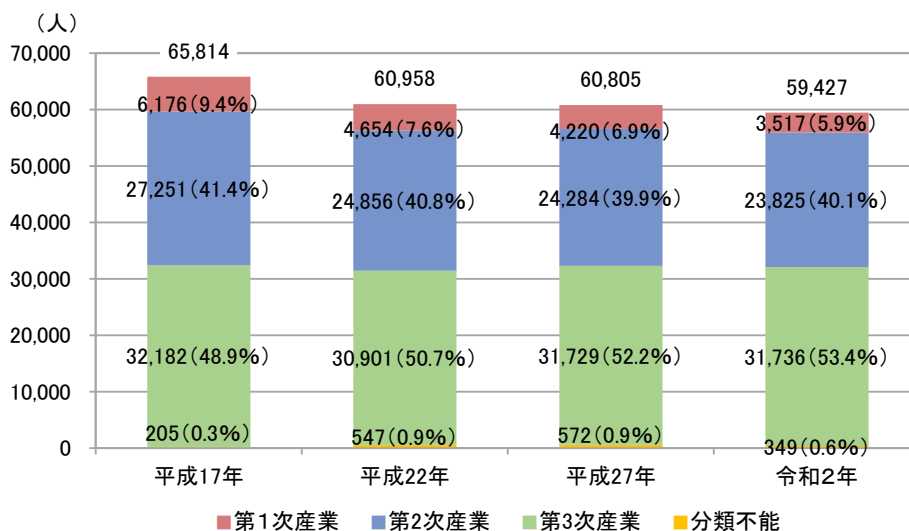


図 1-16 産業別就業人口

資料：国勢調査

①農業

温暖な気候を活かし、全国トップクラスの生産量を誇る緑茶やバラをはじめ、高品質のメロン、イチゴ、トマトなどが生産されている。さらに、伝統ある葛布（くずぬの・くずふ・かっぷ）や甘蔗糖、遠州灘に面した砂地の土壌を活かした石川小芋や落花生、サツマイモ、ニンジンも栽培されている。



斜面を活用した茶畑

緑茶の生産は丘陵地を中心に本市全域に広がり、全国有数の茶産地になっている。日照時間が長く茶葉が肉厚になるため、仕上げに蒸し時間を長くとる「深蒸し」の製法がとられ特産となった。全国茶品評会では、産地賞を何度も受賞しており、おいしいお茶を安定して生産している。また平成25年（2013）には、掛川市、島田市、川根本町、菊川市、牧之原市で行われている、生物多様性を保全する伝統的な農法「静岡の茶草場農法」が世界農業遺産に認定された。

②工業

昭和63年（1988）のJR東海道新幹線の掛川駅、平成5年（1993）の東名高速道路の掛川インターチェンジの誘致に合わせて、市東部の丘陵地に工業団地が造成された。また、交通アクセス条件を活かし、緑豊かな自然環境と調和した工業団地も造られている。令和2年（2020）の製造品出荷額は、約1兆1,877億円（工業統計調査、経済センサス-活動調査）であり、静岡県内第6位の工業生産規模を持つ。

③商業

掛川駅北口周辺の旧東海道に沿って、商店街や飲食店街が集積して、中心市街地を形成している。また、市の南部の旧大須賀町域と旧大東町域にそれぞれ商業集積地が見られる。令和3年（2021）の卸売・小売業の年間商品販売額は、約2,114億円（経済センサス-活動調査）と、静岡県第10位となっている。特に掛川駅周辺の中心市街地では、掛川駅前東街区や掛川駅前西街区の市街地再開発事業、地元特産品を活かしたイベントの開催、NPO法人と連携した空き店舗のリノベーション、掛川城と周辺施設の周遊を促す「まる得パスポート」の発行などの活性化に取り組んでいる。



かけがわけっトラ市

④特産品

本市の特産品である掛川いも汁、わらび餅、いも切り干し、丁葛、遠州横須賀さしすせそ（砂糖、塩、酢、醤油、味噌）、「開運」「葵天下」の地酒は、伝統的な製造、味を現在に伝えている。



遠州横須賀調味料「さしすせそ」

⑤観光

山、川、海と豊富な自然環境を有する本市には、キャンプ場やハイキングコースなど数多くの観光レクリエーション地がある。また、戦国時代から江戸時代にかけて発達した城下町や街道の文化により、往時を偲^{しの}ばせるさまざまな資源が現在も市内の至るところに残されている。歴史街道を活用した文化展も開催されている。

観光交流客数の動向を見ると、370万～390万人で推移しているが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う旅行需要の減少の影響を受け、令和2年度（2020）は平成30年度（2018）と比べて約100万人減少している。



遠州横須賀街道ちっちゃな文化展

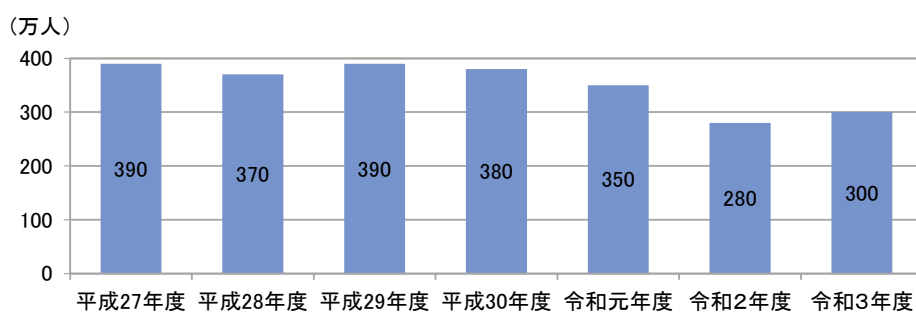


図 1-17 観光交流客数

資料：静岡県観光交流の動向、平成28年度は市調査

本市のシンボルとなっている掛川城（天守閣・御殿）への年間来場者数は、天守閣復元直後の平成6年度（1994）は50万人弱、大河ドラマ「功名が辻」放送時の平成18年度（2006）は約30万人だった。近年では、平成29年度（2017）の15万人をピークに、コロナ禍の影響もあって減少している。その周辺には太鼓櫓や大日本報徳社大講堂などの歴史的建造物、二の丸茶室、二の丸美術館、掛川市立中央図書館などの文化施設がある。

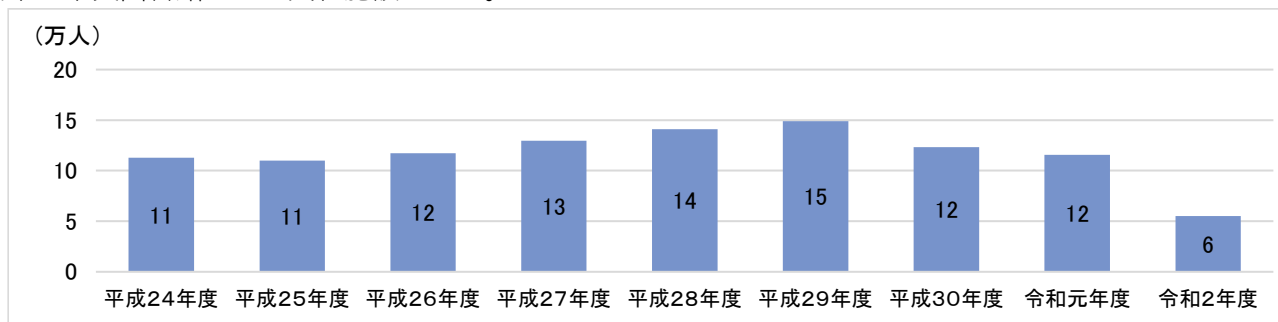


図 1-18 掛川城天守閣・御殿入場者

資料：掛川市統計書

(6) 産業・交通に関する景観

①茶畑

変化に富んだ地形を活かして、市内各所に茶畑が広がっている。新茶の季節には新緑の茶畑で茶摘みをする人々の姿が見られ、茶工場からは芳しい茶の香りが漂う。

栗ヶ岳の東麓に位置する東山地区、日坂地区などでは、山の斜面に檜で描かれた「茶文字」に見守られるなか、斜面地に広がる茶畑、その周囲に広がる茶草場、茶農家の屋敷地、共同茶工場で構成される文化的景観が見られる。

掛川茶業発祥の地とされる和田岡地区、桜木地区、原田地区などでは、原野谷川から立ち昇る霧に包まれることで、鮮やかな緑色の茶畑が広がっている。

小笠山の麓の上内田地区、西南郷地区、曾我地区などでは、山腹まで茶畑が連なり、市内でも毎年早くから茶摘みが始まる所として知られている。

市北部に位置する原泉地区、倉真地区などでは、山や清流などの豊かな自然に囲まれた茶畑が見られる。



栗ヶ岳茶文字

②ため池と谷田

本市の地形特性を活かし、山地や丘陵地の谷を堤でせき止める形で、江戸時代から多くのため池が築造されてきた。ため池と谷田（丘陵と丘陵の間の谷底の水田）は、先人の治山治水の努力によって築き上げられてきたもので、農業生産活動の場としてだけではなく、農村の原風景の保全、多様な動植物の生息の場としても重要な機能を果たしてきた。こうして長い年月にわたり受け継がれてきており、本市では「ため池谷田文化」と呼んでいる。

③とうもん

「とうもん」の風景は、小笠山丘陵と遠州灘との間に広がる広大な田園で、豊かな自然と農業に培われた歴史を伝えている。「とうもん」とは、「稲面（とうも）」または、「田面（たおも）」に由来するといわれ、「水田の広がり」を表すこの地域の言葉である。



とうもん

④斜め海岸林

本市から東の御前崎市に続いている海岸林は、海岸線と平行しないで5度から20度斜めのラインに造成されている。現在確認できる総延長は50kmに及び、そのうち当市は約12kmが該当する。

この地域の海岸線は、東南東方向にのびていることから、冬の厳しい偏西風が海から吹きつけ、地域の人々は多くの飛砂に苦しめられてきた。そのため、幕末以降にこの海岸林を設けることで、強風や飛砂から身を守り、安定した環境を作り出し、農地として利用している。防災と開墾を同時に実現させている地域独自の景観が生み出されている。



遠州灘沿岸の「斜め海岸林」

⑤街道

東海道の間宿「^{はらかわ}原川」周辺に残る松並木は、江戸時代初めの街道整備の際に植えられ、夏の厳しい日ざしや冬の冷たい風や雪から旅人を守っていた。地域住民や道路管理者が松並木の保全活動に取り組んでおり、袋井市との市境に隣接するこの地域には100mに渡り当時の面影を良好に残している。

日坂宿は、東海道沿いの宿場町として掛川宿とともに栄えた。旅籠の修復・保存、高札所の復元、各戸への屋号を記した看板の設置など、地域住民の活動により、風情ある町並みが保全されている。

相良湊（^{さがらみなと}牧之原市）から秋葉山（^{あきはさん}浜松市天竜区）を結ぶ秋葉街道は、火伏の神を祀る秋葉山参詣のため、多くの人々が利用した。この道は、秋葉山から信州へ続いており、古代には海から塩を運ぶ道として、塩の道とも呼ばれている。

横須賀街道は、相良湊から横須賀藩の城下町、横須賀湊、^{てんりゅうがわ}天竜川河口の掛塚湊（^{かけつかみなと}磐田市）に通じる街道である。狭い街道には丁字路や小路が多く、沿道の建物は間口が狭く奥行きが深い。地域住民が中心となった町並みを守り活用する取組により、城下町、神社の祭礼の舞台としての町並みが今も見られる。

（7）地区・地名

本市には201の自治区と81の小区があり、それが33にまとまり「地区」を構成している。すべての地区で「地区まちづくり協議会」が設立されており、区長会（自治会組織）・地域生涯学習センター（地区センター）・地区福祉協議会を中心として、様々な組織の力を結集し、地域の特徴を活かした様々な活動が行われている。

本計画に関連する地名については、資料編資料2に掲載している。



図 1-19 地区の区分

(8) 文化財に関連する施設

①大須賀歴史民俗資料館

旧大須賀町域を中心とした一般の人から寄贈された主に明治時代以降の生活の品々を展示している。生活・農業・綿紡・漁業・消防などの様々なコーナーを設けているほか、当時の機械器具の展示や民家の暮らしを再現するなど、昔の衣・食・住を分かりやすく見て楽しむことができる。



大須賀歴史民俗資料館

②掛川埋蔵文化財センター

市内より発掘された土器・装飾品など、多くの出土遺物を常に展示し、見学できるように公開している。



掛川埋蔵文化財センター

③掛川市立図書館

○ 中央図書館

主に旧掛川市に関する歴史資料を収蔵しており、茶、葛、報徳思想、掛川城、東海道などに関するコレクションがある。生涯学習ホールでは、年に1回、出土文化財展を行なっている。また、毎年、古文書講座を開催している。

○ 大東図書館

旧大東町・旧大須賀町に関する書跡・典籍・古文書の資料の収集・保存、調査を行なっており、郷土の偉人、国学などのコレクションがある。常設展示室「郷土ゆかりの部屋」を活用し、さまざまな文化財の展示会を開催している。

○ 大須賀図書館

特に旧大須賀町に関する歴史資料を収蔵しており、横須賀城跡、横須賀^{みくまの}、三熊野神社大祭などに関するコレクションがある。



中央図書館



大東図書館



大須賀図書館

④ よしおかやよい 吉岡彌生記念館

東京女子医科大学の創立者である吉岡彌生の偉業を顕彰するため、関連資料を展示している。敷地内には市指定文化財の移築された生家と、復元された長屋門があり見学することができる。



吉岡彌生記念館

⑤ 掛川市二の丸美術館

江戸・明治時代のたばこ道具などの細密工芸品と近代日本画、掛川市の歴史文化に関する資料を収蔵する。郷土に関する展覧会も開催している。



掛川市二の丸美術館

⑥ 掛川市ステンドグラス美術館

19 世紀にイギリスを代表するステンドグラス工房で製作された作品を展示している。季節や天候によって微細に変わる自然光と、LED 照明により常に違った雰囲気作品を楽しむことができる。

⑦ かわいやはち 河井弥八記念館

郷土、国政に尽くした河井弥八の功績を讃えるために作られた記念館で、旧河井家の土蔵を改装している。記念館は地域の「河井弥八記念館運営委員会」が運営を行っている。



河井弥八記念館

⑧ 私立施設

○ らんぎゅう 嵐 牛 俳諧資料館

江戸時代の俳人伊藤嵐牛の資料を展示する資料館であり、同時代の文人の資料も展示している。土蔵造の建物で、子孫が資料を整理し展示している。(令和6年末リニューアル)

○ 小夜の中山ゆめあかり 浮世絵美術館 夢 灯

旧東海道小夜の中山さよ なかやまとうげ 峠にある美術館で、歌川うたがわひろしげ 広重、葛飾かつしかほくさい 北斎などが描いた東海道の作品を見学することができる。

3. 歴史的背景

人類の祖先が誕生した約 400 万年前、掛川市域では現在の逆川や原野谷川の流域より南が海面下になっていた。この頃に堆積した掛川層群は、太平洋岸の新第三紀鮮新世から前期更新世の標準層序として位置づけられている。掛川層群からは、現在の熱帯や亜熱帯に分布する貝類の化石が豊富に見つかっており、カケガワキリカイダマシ、カケガワバイなど掛川の名が付けられた化石もある。この掛川層群の貝化石群は、日本地質学会により静岡県 of 化石に認定されている。その後、いくつもの地殻変動を繰り返して、小笠山など現在の地形が形成された。

(1) 先史

①旧石器時代・縄文時代

旧石器時代から縄文時代へ移る時期（約 12,000 年前）の遺跡が、市域の北部で発見されている。^{わたおかぼら}和田岡原段丘の遺跡や^{どうやま}堂山遺跡から、掛川最古の人類が使用した石器が採集されている。また、和田岡原で縄文時代早期に位置づけられる押型文土器が多数確認されており、この時期から集落がつくられていたことがわかっている。

その後、原野谷川や逆川などの川に沿った小高い場所に集落がつけられた。縄文時代中期の約 5,000 年前には、現在より平均気温は 3°Cほど高く、温暖化のピークを迎えた。海面は現在より数メートル高くなり、小笠山の南側あたりまで海が入りこんでいた。その後平均気温は下がり、約 3,000 年前の気温及び海面は、現在に近くなった。^{くりした}メノト遺跡や^{くりした}栗下遺跡をはじめ、市内の縄文遺跡は 50 以上が知られている。住居跡やドングリの貯蔵穴の発見があり、縄文土器のほか、狩りに使われた石鏃、木の実をすりつぶすための石皿や磨石・^{すりいし}叩石、^{たたきいし}魚をとる網につけた^{せきすい}石錘、^{どすい}土錘があり、また玉などの装身具や石棒などの祭祀具が出土している。縄文時代の安定した暮らしを認めることができる。



掛川最古の石器（左：堂山遺跡・右：和田岡）

②弥生時代

2,000 年前には、平野部でも比較的高い場所に集落（ムラ）をつくり、稲作を行っていた。原川遺跡は市域において稲作を始めた初期の集落跡であり、^{たかだ}高田遺跡、^{ひがしのや}東ノ谷遺跡、堂山遺跡からは弥生時代の米も発見されている。

弥生時代の集落には、住居と倉庫のほか、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓と呼ばれる墓が登場する。^{はらしんでん}原新田遺跡で発見された方形周溝墓の中央に掘られた墓穴からは、鉄剣が出土しており、ムラの中での階層差が存在したことを知ることができる。また、江戸時代の歴史書『掛川誌稿』によると、明和 9 年（1772）に^{どうたく}長谷から銅鐸が発見されたと書かれている。銅鐸は西日本に多く分布する祭祀に使われた青銅器であり、本例は日本列島における東限を示すものであるが、現在この銅鐸は所在不明となっている。



長谷の銅鐸の画像

(2) 古代

①古墳時代・飛鳥時代

ヤマト王権を中心とした国家成立に向けた動きが進む頃、各地で地域を治める首長の墓として古墳がつくられた。時期が下るにつれて、古墳の築造は地域の首長を中心に普及し、市域では前方後円墳、円墳などの古墳が約 1,700 基確認されている。最も古い前方後円墳は、逆川左岸に築かれた 4 世紀築造の前坪3 号墳である。その後、和田岡原段丘には前方後円墳、円墳、方墳が数多く造られている。中でも、4 世紀後半から 5 世紀にかけて築造された規模の大きな 5 つの古墳（春林院古墳、瓢塚古墳、各和金塚古墳、吉岡大塚古墳、行人塚古墳）は、帆立貝型の前方後円墳を含み、表面をナデ仕上げされた埴輪を設置した特徴的な古墳群として注目される。

6 世紀になると、横穴式石室の古墳が普及する一方で、丘陵の斜面に横方向の穴を掘り、墓室とした横穴墓が多数造られた。市内では 1,200 基以上が見つかっていて、特に原野谷川中流の本郷、垂木川流域の飛鳥、逆川下流の曽我、菊川流域の中方・岩滑・毛森では数十基がまとまって確認されており、県内でも有数の横穴群地帯となっている。中でも本郷横穴は、埋葬施設が県内最大規模で、全国的にも注目される横穴墓である。豪華な副葬品が出土しており、大和王権に認められ、この地を治めていた豪族の墓と推測される。

大和王権が地方を支配するために設定したのが国造制であり、市域には素賀国造が置かれた。この国造の勢力範囲は、逆川の南の長谷・高御所・領家の地域であったと考えられる。前述した宇洞ヶ谷横穴や木材と粘土で墓室を造り豪華な副葬品をもった堀ノ内13 号墳に埋葬された人物は、素賀国造につながる豪族と推定される。

②奈良時代・平安時代

奈良時代に入ると、古代の行政区画である五畿七道が成立した。政治の中心地域であった五畿（山城・大和・河内・和泉・摂津）とそれ以外の地域の七道（東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道）からなる。七道の下には、国・郡・里という行政組織が置かれた。本市は、遠江国の佐野郡と城飼郡に属した。また、仏教が全国に広まり、遠江国では、国府のあった磐田市域に国分寺も建てられたが、その建物に使用する瓦は本市域の清ヶ谷古窯群で作られた。また、六ノ坪遺跡では、奈良時代から平安時代までの門や建物跡 37 棟が整然と並んで発見された。緑釉陶器や瓦、「寺」と書かれた墨書土器の出土もあるが、建物の配置は官衙的であることから、佐野郡家にかかわる施設ではないかと推測されている。

諸国の人々には、庸や調などの物で納める税を都まで運ぶほかに、都や九州の警備にあたる兵役が課せられ、負担が重くのしかかった。『万葉集』には、兵役で掛川から派遣された防人が詠んだ歌も収められている。また、『枕草子』には事任八幡宮の記述があり、『新古今和歌集』（鎌倉時代）には西行法師による小夜の中山の歌がある。いずれも、古代東海道における本市域の名所の特徴を物語っている。

10 世紀以降、地方でも政治の混乱がみられ、有力者や農民の中には力による行動をとる者もいた。平将門の乱や藤原純友の乱は政情不安のなかで発生した出来事で、こうした時代背景の下、武士が生まれ、力をつけていった。市域には平将門とその一門 19 人の首を吊ったと伝えられている十九首塚がある。

(3) 中世

①鎌倉時代

このころの市域でも、天皇や大きな寺社を領主とする荘園、遠江国の領地である国衙領、伊勢神宮の領地である御厨があった。例えば、菊川河口域を中心に太平洋岸に展開した笠原荘、原野谷川流域の原田荘、上小笠川流域の内田荘などが史料上で知られている。そして、武士たちの存在に目を向けると、原田荘では原氏が、内田荘では内田氏が在地領主として活躍していた。

内田家吉は、源頼朝の軍に加わり、木曾義仲（源義仲）の軍勢と戦ったと『源平盛衰記』に見える。原氏や内田氏などの地方武士の時代は、今川氏がこの地を支配するまで約 300 年続いた。

なお、曾我地区にある地名の「領家」や、東山口地区にある地名の「本所」などは、それぞれ荘園制にちなむ遺称と推測され、こうした地名も少なからず数百年前の中世から受け継がれてきた。



本所の地名

②室町時代

室町幕府を開いた足利尊氏は、同族である今川氏を遠江国の守護に任命した。遠江国の守護は、15 世紀の初め頃までは何人も交替したが、その後、足利氏の一族で、将軍を補佐する職にあった有力大名の斯波氏が任命された。

一方、貴族・大寺社による荘園の支配は、南北朝時代の内乱により大きく後退されたものの、続く室町時代にはその再編成が目指された。つまり、室町時代は荘園制の再編期ないし安定期であったと、近年では評価されている。その背景として、京都に政権を置いた室町幕府が貴族・大寺社との協調のために彼らの荘園の保護を目指したからである。

例えば、原野谷川流域にあった原田荘は、その一部が東寺領となっていた。京都の東寺は大きな荘園領主であったが、原田荘に関わる数百点の古文書が同寺に残されてきた。東日本のなかでは室町時代の荘園史料として希少な量を誇り、ここから荘園に生きた人々の姿を垣間見ることが可能となっている。

このように、幕府・守護の庇護のもと、遠江国でも荘園制を含む地域社会の秩序は安定していた。

しかし、室町時代も後半に入ると、応仁の乱を画期として全国で地方政治が揺らぎ始める。遠江国に関しても、守護の斯波氏が 15 世紀の中ごろに相続をめぐる争いを起こし、この争いが同氏の勢力を衰えさせただけでなく、応仁の乱の原因の一つになった。斯波氏の勢力が衰えると、市内の原氏や川井氏などが勢力を伸ばし、さらに駿河国の守護であった今川氏が遠江国に領国の拡大を図った。

(4) 中世末から近世

①戦国時代・安土桃山時代

戦国時代の市域では、覇を唱えた今川氏や武田氏、徳川氏が交通の要衝などに戦略拠点を設け、この地をめぐる争いを繰り広げた。

【勢力の移り変り】

文明年間（1469～1487）の初め、今川氏の重臣朝比奈氏が掛川古城を築く。今川氏の勢力拡大に伴い、16世紀の初め頃、朝比奈氏が古城の南西500mほどの竜頭山に新たに掛川城（現在の掛川城の位置）を築いた。今川氏の掛川支配は朝比奈氏3代の約70年続く。しかし、桶狭間の戦いで今川義元が亡くなると、今川氏は弱体化し、徳川氏と武田氏の駿河・遠江への侵攻が始まる。

徳川家康は遠江の拠点を確認すべく、掛川城周辺に砦などを築き、掛川城を攻め、永禄12年（1569）に開城させる。家康は、この後およそ22年間遠江を統治する。また、これ以降に徳川氏、武田氏の抗争が表面化し、この地での両軍の戦いは天正9年（1581）の高天神城落城まで10年以上続く。「高天神を制する者は遠江を制す」とまでいわれ、高天神城は武田氏と徳川氏の双方にとって重要な城郭だった。高天神城をめぐる戦いのなかで、軍事拠点として家康は、横須賀湊を整備して横須賀城を築いた。高天神城が落城し廃城となった後、地域支配の役割は横須賀城が引き継ぐこととなった。



山内一豊像

天正18年（1590）、事実上の天下統一を果たした豊臣秀吉は、家康を関東に移し、掛川城には「内助の功」で有名な山内一豊を入城させた。一豊は、在城10年間で城の大規模な改修、天守の建築を進め、城下町を整備した。また、大井川（島田市）の治水工事をして洪水を防ぐとともに新田を開発するなど、領内の町と村々の基礎をつくった。また一豊は、小夜の中山峠の久延寺で家康をお茶でもてなしたとされている。

【掛川茶の始まり】

掛川藩が編さんした『掛川誌稿』によると、天正年間（1573～1592）、永住寺改築の時に檀徒数名が京都方面の寺院を視察した際、茶の種子を持ち帰り、吉岡原に蒔いたのが掛川茶の始まりと記されている。

②江戸時代

江戸時代の市域には掛川藩と横須賀藩が置かれ、掛川城と横須賀城を中心に2つの城下町が形成された。また、江戸と京都を結んだ東海道には掛川宿と日坂宿が置かれ、2つの宿場町が栄えた。

平和なくらしが訪れた江戸時代には、大火により大規模な被害を受けるようになった民衆は、火伏の効力を期待し、秋葉山参詣が盛んとなった。秋葉山を目指した参詣者が辿った道は、「秋葉街道」と呼ばれ、道沿いには秋葉山常夜燈が建てられた。市域には、相良湊から秋葉山へ通じる道が、整備された。

【掛川城を中心としたまち】

掛川は、掛川城を中心に逆川を利用した堀に囲まれた掛川藩の城下町であり、東海道の宿場町としても栄えた。

掛川藩主は、徳川の譜代大名が代々引き継ぎ、江戸時代中期以降は、7代123年にわたり太田道灌の子孫である太田氏が藩主を務めた。太田氏の治世には、遠州地方で初の藩校「徳造書院（後の

教養館)」を掛川城内に設け、藩士だけでなく希望する町方や村方の若者も学ぶことができた。また、藩政改革の基礎資料として『掛川誌稿』をつくらせ、度々発生する飢饉や天災に備えて領内に『農諭』という書を頒布した。太田氏の文教を重んじる家風の影響により、藩全体の文化水準は高まり、遠州地方の政治経済、文化などのさまざまな面で中心地として栄えてきた。そして、藩の運営には、掛川藩御三家といわれた豪商山崎家、松本家、鳥居家などの多大な支援があった。

【横須賀城を中心としたまち】

横須賀は、横須賀城を中心に広がる横須賀藩の城下町である。横須賀街道による東西交通と横須賀湊による海上交易の中継地としても栄えた。

江戸時代中期以降、8代186年にわたり西尾氏が藩主を務め、徳川幕府の要職を務めるとともに、領内の発展にも力を注いだ。農業では、新田開発はもとより、サツマイモ、サトウキビなどの新作物の導入、砂糖の製造を進めた。教育文化面では、横須賀藩学問所「修道館」を設立して儒学、漢学、国学などの学問を奨励した。藩校の教授であった八木美穂は『郷里雑記』を藩主の命により作成した。また、相撲や花火といった住民の娯楽にも心を配っていた。

17世紀後半の日本の農書である『百姓伝記』は、横須賀藩の村役人が書いたものとされている。農業に関する様々な経験や伝承を記したもので、治水や高潮に関する記述もある。

【東海道の宿場町】

市域には、東海道沿いに「掛川宿」と「日坂宿」の2つの宿場があり、多くの人と物が往来した。道中には名所旧跡が多く、浮世絵や名所絵の題材にもしばしば取り上げられた。歌川広重や葛飾北斎が描いた浮世絵の「日坂宿」では、名物のわらび餅や夜泣き石が、「掛川宿」では葛布屋の店先や八挺鉦を打つ芸人の姿が取り上げられている。

【報徳運動の広がり】

江戸時代後期から幕末にかけて、二宮尊徳は独自の指導による教えと仕法により、600以上の困窮する村々の立直しと救済を図った。「報徳」の教えには、至誠（真心をもって事に当たる）、勤勞（一生懸命、心をこめて働く）、分度（自分にふさわしい生活を送る）、推譲（人のため、世のために使う）の4つの柱がある。この「報徳」の教えは遠州地方にも伝わり、嘉永元年（1848）、掛川藩地方御用達岡田佐平治により倉真村に牛岡組報徳社がつくられ、浜松、磐田、そして旧掛川市域を中心に報徳の教えが広く及んだ。また報徳仕法は、教えにもとづく施策で、節約・貯蓄を中心とした財政再建策で農民に新しい生活様式を提案した。水の少ない本市の山間地にはため池が多くあるが、これらは安定した水稻耕作をするため、報徳仕法により造られたものが多い。

（5）近代

①明治時代

明治維新により、各藩主は領地を新政府に返し、掛川藩と横須賀藩の区域は、徳川家達を藩主とする静岡藩政下となった。さらに、明治4年（1871）の廃藩置県により、藩は廃止され、静岡県の管轄下になった。

新政府は、近代国家を目指し、国民教育の充実を図った。明治5年(1872)、「学制」の公布に基づき、市内に8つの小学校が開校された。明治10年(1877)7月、報徳社の岡田良一郎は、中等教育が必要と中学校の設置を要請するが認められないことから、自邸に私塾「冀北学舎」を開設し、岡田良平、山崎覚次郎をはじめ多くの優秀な人材を輩出した。



冀北学舎の建物

明治時代の主たる産業は農業であった。特に明治20年頃からは、米作の他に茶の生産が盛んになり、生産量も大きく伸びていった。また、江戸時代から掛川藩の特産品であった葛布は、明治時代に入ると武士の袴などの需要が減り、生産量も落ちたが、明治30年頃から壁紙として海外にも輸出されるようになった。

鉄道整備が進む一方で、産業の近代化のために有志が道路を整備した。日本で初の民営有料道路となった「中山新道」の建設はその一例で、東山の茶園造成を進めるために必要な道としてつくられた。収穫した茶をいち早く市場へ出荷するため、道の整備と隧道(トンネル)造成を行なった山崎千三郎や青野卯吉らの取り組みもその例であった。

明治22年(1889)、東海道本線の浜松－静岡間が開通し、掛川駅が誕生した。

②大正時代・昭和時代(戦前・戦中)

大正3年(1914)、中遠鉄道により新袋井－新横須賀間10.3kmの鉄道線が開業し、昭和2年(1927)、新三俣まで延長して、中遠鉄道線が全通する。昭和18年(1943)、戦時統制により中遠鉄道は、静岡鉄道に統合される。また、昭和10年(1935)、二俣線(現在の天竜浜名湖鉄道)の掛川－森町間が開通した。

太平洋戦争が始まると社会は戦時体制に入り、敗戦間近の昭和19年(1944)には東南海地震もあり、本市も大きな被害を受けた。遠州浜には陸軍遠江射場など、戦争があったことを知る施設が残っている。

(6) 現代

①昭和時代(戦後)

空襲の被害を受けることのなかった中遠鉄道線は、昭和23年(1948)に池新田(御前崎市)まで開通し、袋井市から本市の南部を通して藤枝までを結ぶ軽便鉄道が全通する。駿河国と遠江国を結ぶことから「静岡鉄道駿遠線」と名付けられる。昭和42年(1967)に廃止されるまで、人々の重要な移動手段として利用された。

敗戦によって衰退した日本の工業は、昭和25年(1950)に起こった朝鮮戦争を契機に発展し始めた。市内でも、楽器、オートバイ関連の工場などが造られ、機械化が進んだ。また、昭和26年(1951)に国道1号線が完成し、高度経済成長に伴って自動車の生産量が増加し、さらに計画的な道路整備が求められるようになった。昭和44年(1969)には東名高速道路が開通して、工場進出が促進された。

農業においては、本市を含め小笠山周辺地域では水不足の問題が長く続いていた。大井川から用水を導く「大井川疏水計画」が明治時代に策定されるも幻の計画となっていたが、昭和47年(1972)

に大井川右岸用水として完成し、たび重なる干ばつに悩まされてきた地域の水利条件は大幅に改善された。昭和 52 年（1977）に静岡県大井川広域水道企業団が設立され、旧掛川市、大東町、大須賀町もこれに加盟し、安定した水を得ることができた。

昭和 29 年（1954）から昭和 35 年（1960）にかけて進められた合併によって、旧掛川市と大須賀町が誕生し、昭和 48 年（1973）には 大浜町と城東村が合併して大東町が誕生して、1 市 2 町が成立した。

昭和 50 年（1975）に高天神城跡が、昭和 56 年（1981）に横須賀城跡が国史跡に、昭和 55 年（1980）に掛川城御殿が国の重要文化財に指定されている。

昭和 54 年（1979）、旧掛川市は全国初の「生涯学習都市宣言」を行なった。幸せを感じるため、自分たちの住むまちを良くするため、自らが住むまちのまちづくりに活かしていくため、一生涯を通じて学習していこうと、「生涯学習まちづくり」が進められることとなった。こうした住民参加のまちづくりの大きな成果の一つとして、昭和 63 年（1988）の東海道新幹線の掛川駅の開業が挙げられる。

②平成時代

その後も、市民力により、東名高速道路の掛川インターチェンジの開通、掛川城天守閣（日本で最初の本格木造復元天守閣）の再建などの大事業も次々と実現した。掛川城大手門も復元され、風格のあるまちづくり事業が進められている。

平成 17 年（2005）4 月、旧掛川市、大東町、大須賀町の合併により、現在の掛川市が誕生した。海や山などの自然環境、城をはじめとする歴史的な資源、東海道新幹線や東名高速道路などの交通網を活かしたまちづくりが進められることとなった。

この間、平成 8 年（1996）に和田岡古墳群が国史跡に、平成 21 年（2009）に大日本報徳社大講堂が国の重要文化財に指定されている。

平成 25 年（2013）に本市のまちづくりに関する最高規範として、「掛川市自治基本条例」が施行された。この条例では、掛川市をさらに成長させ、成熟した社会を構築するために、市民主体のまちづくりの実現を目指し、「協働のまちづくり」を進めることとしている。その基本的な考え方は、生涯学習都市宣言の理念として、この地に脈々と受け継がれている「報徳」の教えに基づくものである。

③令和時代

令和 2 年（2020）に国から SDGs 未来都市に選定され、経済・社会・環境のバランスがとれた持続可能なまちづくりを目指し、本市が有する財産をより良い形で将来の世代に引き継ぐための取組を行なっている。

新型コロナウイルス感染症の影響により市内の祭礼行事が制限される一方、^{まつがおか}松ヶ岡（旧山崎家住宅）や掛川城復元天守閣の修復工事、掛川城周辺の歴史的な風致に調和した町並みの整備、史跡和田岡古墳群の一つである吉岡大塚古墳の整備工事、茶産地の歴史にもスポットを当てる「掛川茶リブランディングプロジェクト」など、歴史を活かしたまちづくりを進めている。



掛川城天守閣